

『もりおかの短歌』

秋の部 優秀賞十首

この秋もあき ひれやぶ 鱧破れたる

鮭さけいくつ

与よ じばしの字橋にて魚影ぎよえいに見入みいる

盛岡市 石川 修子

欄干らんかんに身みを乗のり出だして「来きた来きた」と

街川まちかわゆび指さし

鮭さけをむかえる

盛岡市 堀米 公子

句読点感嘆符などくとうてんかんたんふつきている

『悲かなしき玩具がんぐ』の

行間ぎょうかんの白しろ

京都府長岡京市 吉田 正美

もりおか まち ある  
盛岡の街を歩けば

たくぼく ちが  
啄木とすれ違いそう

すす  
まっすぐ進む

秋田県湯沢市 佐井 良子

たくぼく せつこ あい せつ  
啄木と節子の愛の切なさに

おも は  
想ひを馳せる

ふうふ ひ  
いい夫婦の日

青森県青森市 鈴木 操

ばんしゅう  
晩秋に

まつ み ふゆじたく  
松の実かじり冬仕度

いそが うんどうこうえん  
リスも忙し運動公園

盛岡市 赤坂 昌信

いただ くも おほ  
頂きを雲に覆はるる岩手山 いわてさん

こころ のこ  
心に残して

あさひばしき

旭橋去る

千葉県市川市 長田 強子

やますそ

山裾の

ことうよう  
オオヤマザクラ紅葉し

ひのと

さと

あき

ふか

日戸の里の秋は深まる

盛岡市 小林 貴史

ごしよこはん

御所湖畔

きばな

さ

ころ

黄花コスモス咲く頃に

ぬるゆ

つま

つ

つなぎの温湯に妻と浸かりぬ

盛岡市 小林 貴史

うま

チャグチャグと馬コが渡る中津川 わた なかつがわ

せ

の

あこ

背に乗る吾子に

しよか

かぜ

初夏の風ふく

岩手県矢巾町 小野寺 一洋

秋の部（ジュニア部門） 優秀賞三首

もりおか  
盛岡が

う てんさい  
生んだ天才 たくぼくの

きも  
気持ちになって

しば  
芝にねそべる

盛岡市 村上 諒

もりおか  
盛岡は

やま かこ  
山に囲まれ 川多し

わ ふるさと  
ロマンあふれる 我が故郷よ

盛岡市 川村 樺音

たくぼく しんこん いえ よ  
啄木の新婚の家で読みふける

いわてにっぽう  
「岩手日報」

れきし かん  
歴史を感じ

盛岡市 相馬 美織

【講評】

暑からず寒からずの好季節「秋の部」の応募総数は178通でした。そのうち68通はジュニアの皆さんは自主研修という学習の一環として、または「盛岡通の旅」というテーマのもと、グループごとに興味のある場所や施設などマップを頼りに巡った様子が伝わります。一般の部では鮭の遡上や岩手山、あるいは啄木の歌集など、素材に幅があり心に響く作品に多く出逢うことができました。

平成三十年十二月選 秋の部

投稿数 百七十八首  
選者 松田 久恵

『もりおかの短歌』秋の部

〈一般部門〉優秀賞十首

方形ほうけいの射抜まといぬかれて真まっぶた二つ

うま

馬うまは疾駆しっくすよ

はちまんぐう

八幡宮はちまんぐうの馬場ばば

盛岡市 石川 修子

君きみが住すむ不こず来かた方のさと

あき

秋あきめいて剥むきたたての柿かき

のき

軒のきを色いろどる

盛岡市 赤坂 昌信

うちまる

内丸うちまるのそぞろ歩あるきのつれづれに

とち

栃とちの実み落ちて

あき

秋あきを奏かなでる

盛岡市 中島 久光

ふうりゆうだし  
風流山車

こうじょうそら さ  
口上空に冴えわたり

たいこばやし とつじよな だ  
太鼓囃子が突如鳴り出す

盛岡市 小林 貴史

たくぼく す た もの  
啄木の好きな食べ物

そば かぼちゃ  
蕎麦南瓜

むし ねき こよいあじわ  
虫の音聞いて今宵味う

盛岡市 西川 政勝

ヤーレヤレの

か ごえひび あきまつ  
掛け声響く秋祭り

だし ぎぼし にあ もりおか  
山車と擬宝珠の似合う盛岡

盛岡市 河野 康夫

きざはし のぼ  
階を昇り

ざしき ま  
座敷に待ちをれば

わ だし そばてん  
和の出汁かほるわんこ蕎麦店

盛岡市 工藤 由美子

なかつがわ  
中津川さざ波の中鮭還る

なつ  
もりおか懐かし

こい  
ふるさと恋し

青森県弘前市 木村 千尋

もりおか  
盛岡のお城の堀に

ぽっちゃん

とち み お あき ふか  
栃の実落ちて秋の深まる

盛岡市 鈴木 充

たくぼく あやか かんせいと す  
啄木に肖り感性研ぎ澄まし

お ぼ ふ し  
落ち葉踏み締む

もりおかじょうあと  
盛岡城跡

青森県青森市 鈴木 操

令和元年秋の部

秋の部〈ジュニア部門〉 優秀賞

該当なし

【講評】

一般部門

秋の部を担当するのは初めてですが、心のこもった作品が多く寄せられ嬉しく思います。岩手や盛岡、そして啄木に対する思いの深さがどの歌にも表れており感心いたしました。中には、もう少し推敲すれば、もっと良くなる歌が多くありましたので、投稿する前に推敲することを心がけて欲しいと思います。

令和元年十二月選 秋の部

投稿数 百十二首

選者 山本 豊

『もりおかの短歌』秋の部

一般部門 優秀賞十首

千年の

せんねん

れきし

みちのく

厂史をこえて陸奥の

えみしまも

いじのあざまろ

蝦夷守りし伊治皆麻呂

神奈川県横浜市

伊治 哲

疫病に中止となるも

えきびょう

ちゅうし

はちまん

まつりばやし

八幡の祭囃子の

き

ゆう

聞こえる夕べ

秋田県大仙市

鈴木 仁

盛岡の市役所前の

もりおか

しやくしよまえ

ナナカマド赤い実生りて

あか みな

あき

かぜふ

秋の風吹く

盛岡市

鈴木

充

技と究わざ きゅうの

こころ寄よせ合あふ裂さき織おりの

ブランド輝ひかるロマンけん県都とに

釜石市 中嶋 多喜子

岩手山いわてさん

山の紅葉やま こうようながめつつ

古希こきの祝いわいのフルムたーン旅び

千葉県浦安市 金井 厚子

幼おさなより貧まずしき中なかで

啄木たくぼくの歌うたを暗あん誦じゆし

喜寿きじゆ超こえしわれ

青森県青森市 鈴木 操

もりおかに見みえる山やま並なみ優やさしくて

語かたりくるやう

夕日ゆうひを受うけて

千葉県山武郡 齋藤 博

コロナ禍かに

しろおとず

もりおかの城訪れて

こころしずか あき ながあめ

心静な秋の長雨

茨城県守谷市 飯塚 忠

あさや みこだあさいち

朝焼けの神子田朝市

は いき しろ ひと

吐く息の白さに人の

あたたかさあり

富山県富山市 早川 晃央

とのおみや

遠里や

よる しじま

夜の静寂によみがえる

おど しろ ばぢ て

さんさ踊りの白き桴の手

宮城県多賀城市 小松 隆夫

令和2年秋の部

秋の部（ジュニア部門） 優秀賞

該当なし

【講評】

一般部門

今回の優秀賞には他県の方が多かった。九十三歳の方がいたことも嬉しかった。盛岡は啄木のイメージを持っている方が多いと実感したが、啄木に拘らず新しい盛岡を発見して欲しい。素材を大切にして歌を詠みましよう。

令和二年十二月選 秋の部

投稿数 八十八 首

選者 赤澤 篤司

『もりおかの短歌』秋の部

〈一般部門〉優秀賞十首

逝ゆきし友とも

包つみ込こむまち盛岡もりおかの

こころ優やさしきふるさとの人ひと

盛岡市 赤坂 昌信

辛つらい時ときいつも仰あおぐは岩手山いわてさん

強つよく生いきよと

鼓舞こぶしてくれぬ

盛岡市 小林 貴史

六十年前ろくじゅうねんまえ

開運橋かいうんばしのたもとにて

水みずあそびする母ははとわれ

宮城県仙台市 角館 俊一

あちこちに君きみの面影おもかげみるような

不來方こずかたの秋あき

君きみなき休日きゅうじつ

東京都練馬区 鳥嶋 翔陽

ききおよぶ

大つなみおおの後あと海原うなばらも

今は静いまけきしず 宮古みやこの海うみよ

神奈川県南足柄市 加藤 享子

大津波おおつなみ

鮭しゃけの稚魚ちぎよをも攫さらひしか

遡上そじょうの見えぬ中津川なかつがわなる

盛岡市 餘目 忠吉

やまめ住すむ岩手いわての川かわを黒くろくする

腹はらビレ光ひかり

急沢きゅうざわ登のぼる

盛岡市 田村 勝男

宵の写メ

三十日提灯娘に送る

静けく返すもりおかの月

釜石市 中嶋 多喜子

新妻と過ごせし家よ赤錆びる

トタンも秋陽の

日だまりと照る

福岡県太宰府市 仁田原 秀明

啄木が愛でたる虫の子孫かも

好摩の駅で

蟋蟀を聞く

盛岡市 中島 久光

令和3年秋の部

秋の部（ジュニア部門） 優秀賞

該当なし

【講評】

一般部門

ふるさとに皆何を求めるのでしょうか？優しい母との  
思い出、鼓舞してくれる父、気の置けない友人…、もう  
いないのかもしれない。でもそこに行けば、鮮やかな  
記憶とともに、大切な人にもう一度逢える―そう思わせ  
てくれる場所を私たちは「ふるさと」と言っているので  
しょう。

令和三年十二月選 秋の部

投稿数 百二十三 首

選者 山本 玲子

『もりおかの短歌』秋の部

〈一般部門〉 優秀賞十首

でんとう

伝統のチャグチャグ馬コ

すず ねな

フランスで鈴の音鳴らし

シャンゼリゼをゆく

盛岡市 小林貴史

か ほうず たかほらやま とざんろ

枯れ葉埋む高洞山の登山路に

ばあらわ

ぬた場現れ

しか けはい

鹿の気配す

盛岡市 岩館公子

こずかた

不来方の

しろ とち み やくしゆ

城の柝の実を薬酒とす

あき よろこ あき たの

秋の喜び秋の愉しみ

盛岡市 林浩子

しろあと いちよう もみじ  
城跡に銀杏の黄葉

ち かひ さわ  
散りしとき歌碑に触りて

かる おとた  
軽く音立つ

奥州市 遠藤カオル

たくぼく  
啄木になりしつもりで

そらあお てんさい くも  
空仰ぎ天才の雲と

かた たの  
語らうは楽し

盛岡市 小林貴史

たくぼく こみち  
啄木の小径に

とつじよ  
突如カモシカが

すがた み あき いわやま  
姿見せけり秋の岩山

盛岡市 鈴木充

ねえ こえ いっぱい  
わんこそば姉さんの声でもう一杯

きふだ  
木札にぎりしめ

おなかかかえる

東京都荒川区 川真田ゆう

きたかみがわ いっびつせん  
北上川の一筆箋に

よみがえる 逆波立ちし  
さかなみ た

わか ひ こい  
若き日の恋

千葉県四街道市 宮野俊洋

せいりゆう さけ なかつがわ  
清流を鮭がのぼりくる中津川

れきし  
歴史をきざむ

さんばし  
三橋のあり

盛岡市 照井時彦

きたかみ みなも  
北上の水面きらめき

よみがえ  
甦る

わか ひ きみうた よ こえ  
若き日の君歌を詠む声

東京都練馬区 土肥千代子

『もりおかの短歌』秋の部

〈ジュニア部門〉 優秀賞

(応募時、中学生以下に限る)

該当なし

【講評】

一般部門・ジュニア部門

好季節の秋ですが、今年はコロナウイルスの流行で多くの人々が旅行や不要不急の外出を控えた印象を強くいただきました。それでも「秋の部」の応募総数は1111通に達しました。チャグチャグ馬コがパリのシャンゼリゼ通りのパレードに参加し、日本の馬っこ文化の凱旋としてニュースになったことも、花を添えてくれたことと嬉しく思います。

令和四年十二月選 秋の部

投稿数 百十一首

選者 松田 久恵